

Philip Meadows Taylor の *Tippoo Sultan: A Tale of Mysore War* について

小西真弓

序

「マイソールの虎」と呼ばれる暴君の名をタイトルにした Philip M. Taylor の *Tippoo Sultan: A Tale of Mysore War* (1840) は 1782 年に病没したマイソール藩王国の君主ハイダル・アリー (Hyder Ali) の後を継いだティプー・スルタン (Tippoo Sultan) の率いる軍団とイギリス軍との攻防戦、いわゆる第二次～第四次マイソール戦争を背景にした物語である。この作品を論じるにあたっては無論、作者自身が最終的にイギリス側に同盟したハイデラバードのニザーム藩王の後継者に仕えていたこと¹⁾、マイソール戦争の資料として東インド会社の軍人であった Mark Wilks の *Historical Sketches of the South of India* (1818) や²⁾、イギリス軍の指揮官として参戦した Wellington 公爵 (Arthur Wellesley) の回想を参考に行っていることを考慮しなくてはならない。³⁾ 従って物語全体の印象は当然のことながら、戦争

の原因となったのは、ティプーの権力拡大欲であり、そのために手段を選ばない彼の暴虐から南インドの民衆を救ったイギリス側は正義であるという感じを与える。しかし作者はこの小説を、イギリス人の視点ばかりではなく、インド人の目を通して描き、少なくともマイソール戦争とその複雑な背景を双方の立場から伝えようとしている。それは大きく分ければ南インド出身の青年 Kasim Ali を中心にした主筋と、イギリスからやってきた若い士官 Herbert Compton とその家族や友人の行動と運命を重視した副筋から構成され、戦争という惨劇の中で出会った両者の間に芽生える友愛が物語のクライマックスとなっている。

I

Tippoo Sultan に登場する人物の中で、インド人側の立て役者とも言うべき Kasim Ali がティプーに仕えるようになったきっかけは、マイソール軍の士官 Abdool Rhyman

* テキストには、Philip M. Taylor, *Tippoo Sultan: A Tale of Mysore War* (1840; rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1986) を使用した。本文中の括弧内の頁数は全てこのリプリント版によっている。

1) Taylor の伝記的事項については、*The Dictionary of National Biography* (London: Oxford University Press, 1993), XIX, 452-53 を参照した。

2) 物語の中に Mark Wilks への言及がある。Taylor, *Tippoo Sultan*, 413.

3) Philip M. Taylor, *The Story of My Life*, ed. by his daughter (1877; rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1986), 120 参照。

Khan との思いがけない出会いであった。1788年6月のある日、ハイデラバードから花嫁を迎えてアドニ付近の街道を通りがかったAbdoolとその一行は、雷雨を避けるためにあわてて川を渡って対岸の村へたどり着こうとするが、折から増水した川の中でAbdoolの幼い新妻Ameenaを乗せた籠が流されてしまい大騒ぎとなる。幸いにも、近くの川辺を散策していたKasimが事態を察して川へ飛び込み、命がけて彼女を救出する。その功績に深く感銘したAbdoolは、Ameenaとも相談の上、Kasimに自分の家臣となってセリンガパタムで活躍するように勧める。Kasimには、Abdoolに同行するために自分を唯一の頼りとする母親を村に置いていくのも気がかりであったが、マイソールに仕えれば、自分の立身出世ばかりではなく、マラータやニザームの台頭で零落した先祖代々の家や村を復興するチャンスも得られるように思われた。そこで彼は、母親の同意を得てAbdoolらと共にセリンガパタムへ旅立ち、道中で村々を襲撃するマラータ族と勇敢に戦ったり、ペルシャ語やウルドゥー語の詩を朗唱してAbdool一行を感嘆させる。そのような彼がセリンガパタム到着後間もなく、ティプーから目をかけられるようになるのも不思議ではなかった。実際に出自よりも一個人としての能力を重んじたティプーにとって、Kasimのような文武両道に秀でたイスラム青年は、南インドからイギリス人を一掃して自らが支配者に納まるために必要な人材であった。周囲の予想通り、Kasimは戦士や文官としての能力を高く買われてティプーに仕えることを許され、やがてニザームとの交渉役に任命されたり、マイソール軍の大佐(Jemadar)にまで昇進する。彼がトラバン

コールとの戦いで一身を挺してティプーを敵の反撃から守ったのも、身に余る栄誉を与えてくれた主君の恩に報いるためであった。

Abdoolやティプー・スルタンを引き付けたKasimの活躍ぶりを分析してみると、確かに彼にはイスラム戦士が重んじる美德
勇猛果敢さや義侠心 が投影されている。しかし彼がティプーと共に命がけて戦うのは本来、外敵から先祖代々の家や村を守るためであり、狂信的なイスラム信仰や自らの領土を拡大するというような野心からではなかった。ヒンドゥー教徒の村民や友人を少なからずもつKasimには、彼らばかりではなく、キリスト教徒でさえ、イスラム教徒の平和な生活を脅かさない限り、あえて剣を交えるべき相手ではないのである。ましてや、戦争を口実に弱い立場にある捕虜や被征服民に暴力を振るうのは、彼にとって恥ずべき行為だった。それ故、セリンガパタムで初めて目にしたイギリス人捕虜に対する迫害の場面は、彼に強い衝撃を与える。公の場で残虐に処刑されたり、さらし者にされるイギリス人たちにKasimは同情を禁じ得なかった：

捕虜たちが一人一人彼の前にやって来た。そのうちの何人かは、嚴重に鎖で繋がれていたが、縛られていない者もあった。しかし彼らすべての顔に苛酷な捕らわれの身の表情が表れていた。顔色は青白く、物憂げで、多くの者たちは病や心身の苦痛でやつれていた。彼らは過ぎにし日のあるべき姿の影法師だった。擦り切れた衣服が彼らに纏いつき、汚れてはいないがそれらは度々自分たちで洗濯していることを物語る色をしていた。彼らの足どりは

弱々しくゆっくりで縛られている者は動くことさえ困難であった。…以前 Kasim は同胞と同じように彼らを憎もうと決心したが、憎めないと感じた。イギリス人にふさわしく勇敢なはずである男たちが、どうすることもできない不幸を物語っているような悲惨な有様を見せるので、押さえようとしても哀れに思う気持ちがこみ上げてきてしまうのだった。…彼はかつて異教徒のイギリス人捕虜を見たら胸中に勝利の感慨がわいてくることを期待した。しかし物悲しい行列の有様には何かしらあまりにも心に訴えるものがあり、彼には全くそういう感じがしなかった。彼はその行列を見た時に、囚人たちに悪感情を露にする仲間に加わるよりも、むしろ涙をこぼすことができたかもしれなかった (115)

このような心情から Kasim は、イギリス人捕虜たちに投石する子供をムチを振り上げて追いつめ、また初めて出仕した宮廷では、捕らわれの身であった Herbert が、イギリス人捕虜を惨殺したことをなじってティプーに切り殺されそうになるところを、主君の剣の前に立ち足が助ける。いかに異教徒の敵とはいえ、彼には兵士として勇敢に戦い、抵抗できない境遇に陥った者に対する暴力は黙認できなかった。なるほどそのような彼の義侠心は Abdool やティプーを感服させる。しかし皮肉なことに、Kasim の義侠的な行為は彼を取り巻く同胞の蛮行を浮き彫りにしているばかりではなく、「君のような勇敢で優しい心をもつ人は、あだ名が象徴するように性質が虎のようで、荣誉を野蛮で無慈悲な行為によって得た [ティプー] なんかには仕えることができない」(118) という Herbert の言葉が示唆するように、彼がイギリス軍に寝返る伏線になっていることは見逃せない。即ち、Kasim にはイギリスの軍人たちとの接触を契機に、

ティプーの野蛮性を見極めて彼らに取り込まれるという役割が担われていることが物語の展開につれて明らかになる。実際にこの小説の中の主なイスラム教徒らは Kasim と比較されることで、あるいは彼とどのように関わるかで、その人間的価値や信仰のあり方を問われ、その結果としてイギリス側の立場が支持されているのである。例えば、ティプーが取り立てる Jaffar Sahib は、捕虜の Herbert よりもむしろ同志であるはずの Kasim に対して悪意を抱いたり奸計を練る場面で、悪党としての馬脚を表わす。イギリス人に対する敵意や偏見はさておき、Jaffar の内面に潜むエゴイズムや邪悪な欲望は、彼とは対照的な性格をもつ Kasim との接触によって顕在化されている。同様に、Jaffar の中傷を真に受けるようなティプーも、その迷妄性や蛮行のために Kasim から見限られ、身の破滅を招いたように思われる。そのような顛末は、そもそも理想的イスラム君主として Kasim に仰がれるような美徳や器量がティプーには不足していたことを物語っているのである。また一見 Jaffar やティプーとは対照的に誠実に見える Abdool でさえ、イスラム教徒にありがちとされる否定的な特質や因習に捕らわれるために妻たちから疎んじられ、その結果彼女たちの関心がより理想的な人格をもつ Kasim に向くことになる。一方、イギリスから到来した Herbert や彼の友人である Philip Dalton は、正義感の強い有能な士官としてマイソール戦争に挑み、人々の注目を集める。Kasim が彼らの紳士的なマナーに触れてイギリス人への偏見を改め、最終的にイギリス軍に組するという経緯は物語において重要な意味をもっている。

Kasim を取り巻くイスラム教徒の中で最も悪らつに感じられる Jaffar Sahib には、異教徒を迫害する狂信徒というイメージの他に悪意に満ちた守銭奴としての特徴が投影されている。Jaffar が Kasim に悪意を抱いたのは、Abdool の軍馬の飼料の購入費用を Naser-oo-deen に水増し請求させて公金を横領していたことを Kasim に気づかれたためである。Jaffar にとっては、新参の Kasim によって悪事を公にされてイスラム教徒としての名誉を傷つけられることよりも、むしろ役得を失ったり、賠償金を払わされるほうが不都合であった。そこで彼は、賄賂を使って Kasim を買収しようとしたり、取り引きに応じない彼を殺害しようとするまでが失敗に終わる。思い余ってティプーに自分が無実であり、何とか事を丸くおさめてくれるよう泣きついてみても、逆に嘘を見破られて宮殿から追い払われる有様であった。また Abdool に彼と Ameena の不義密通を中傷しても、結果的に彼の陰謀の犠牲になったのは、勝ち目のない戦いに志願して戦死した Abdool のほうで、Kasim は Abdool と共に命をかけて出陣した功績をティプーに称えられて昇進さえする。怒りの収まらない Jaffar はついに最後の手段として、殿をとって故郷へ帰ろうとする Kasim がニザームやイギリス側に加担するとティプーに吹き込んで彼を道中で暗殺する気にさせる。結局彼らの計画は水泡に帰し、Kasim はティプーを見限ってニザームとイギリスの同盟軍に加わり、彼らをセリंगाバクタムの要塞へ導く。思いがけない結果に Jaffar は狼狽するが、貪欲な彼は敗戦の混

乱に紛れて要塞からティプーが蓄えた財宝をこっそり持ち出し、道中の川で重い金を対岸へ運ぶ最中に激流に流されて溺死する。

イスラム教徒が忌み嫌う罪を次々に犯した Jaffar の悲惨な最期に、読者は溜飲の下がる思いがしたであろうか。彼が物語において排除されるべき悪党として登場し、主君のために最期まで勇敢に戦うイスラム戦士らの引き立て役として描かれていることは明らかである。しかし、イギリスの読者にとって、Jaffar の死が因果応報的に感じられるとしたら、それは彼がイスラムの同胞を裏切ったからというよりも、イギリス人捕虜に危害を加えたためではないだろうか。その悪業に関しては、彼に命令を下す立場にあったティプーのほうが罪深いと言えようが、物語において実際に捕虜を残酷に取り扱うのは Jaffar であり、彼の性格は次のように描写されている：

最下層の出身であったためか、[Jaffar] は獰猛な性格をもっていた。そのことは、スルタンの関心を引きつけ、彼は今の地位に速やかに昇進した。彼はまた自分の手で思うままに残虐性を発揮する心づもりのある手先であった。戦争がイスラム教の布教されていない地域に広がって強制的な改宗が実行される場合、あるいは罪はないが改宗者になろうとしない人々を絞首刑にする時は、軍人としての手際良さや良心のとがめない性格を見込まれて、Jaffar が [ティプー・] スルタンの周りに沢山いる同じ様な類の人々の中から選ばれた。彼はアルコットで生まれ、その住民の特徴である偏見と盲信を受け継いだために、悪意を抱いてイギリス人を憎んだ。そのことだけが、マイソール軍全体の中でもスルタン自身について群を抜いていたのである (95)

Jaffar のイギリス人に対する残虐性は、若いイギリス人捕虜が崖から突き落とされる

場面やその無惨な亡骸を Herbert に目撃させて、ペドノアでの戦闘時に Matthews 将軍が隠したと言われる財宝の在り処を白状させようとする場面に如実に反映されている。なるほど Jaffar がイギリス人を憎む気持ちは、イスラム教徒特有の「偏見と盲信」から生じていると言えようが、実際に彼が Herbert を取り込むことにとりわけ執着するのはその財宝を我が物にするためである。それ故、彼は Herbert に「財宝のところへ連れて行ってくれたら、お前の命を救う。海岸が近いし、逃げられるぞ。(210)」と主君を裏切るような話までもちかける。また彼がマイソールの士官として同胞と共に最後まで戦うこともなく、要塞から財宝を持ち逃げしたりするのも、つまるところ Jaffar にとって重要なのは、マイソールでもイスラムの大義でもなく私利私欲を満たすことだったことを暴露している。

Jaffar を一目見て好ましからざる人物だと直感した Kasim とは対照的に、長年彼の人格を見抜けなかったティプーや Abdool は確かに愚かだと言えようが、イギリス人の Matthews さえ彼を信頼して騙し討ちにあい、悲惨な最期を迎える。そのためか、Jaffar の悪党ぶりが強調されればされるほど、彼から被害を受ける登場人物の不正行為や蛮行は遠景化していくように感じられる。例えば、Matthews はインド人から略奪したと思われる財宝の分配を怠ったために、下士官の不信感を買ったり戦略を誤って敗北する羽目になるが、その責任がさほど問われずに、彼が被害者であるような印象を受けるのは、財宝を奪還しようと彼を欺い

た Jaffar の悪徳があまりにも際立っているからである。また捕虜となった Matthews が財宝のありかを白状しないために毒殺されるという事件は、イギリス側に報復を含むマイソール攻撃の口実を与えることにもなる。Herbert や Philip らに加害者意識が殆ど無いのも Jaffar のような悪党を排除するための軍事行動が彼らにとって、正義にも感じられたからであろう。その一方、悪の化身のような Jaffar の性格付けによって、Abdool は勿論、ティプーの野蛮なイメージさえ希薄になっているのも否定できない。

不名誉な死に方をした Jaffar と比べると、イギリス人によってイスラム風に手厚く葬られたティプーや Abdool は、少なくともイスラム戦士としてはそれなりにイギリスの読者を魅了する人物として描かれている。彼らの壮絶な最期を詳細に描く作者の筆致には、「イギリス人の決闘の作法によれば、たとえ誤っていても、信念のために戦い、戦場で死ぬことを好むのは賞賛すべきである」⁴⁾ という通念が反映されているように思われる。暴虐の限りを尽くしたと言われるティプーはともかく、Kasim からその死を嘆き悲しまれた Abdool は、かなりの程度まで読者から愛されるインド人、即ちイスラム教徒に特有な美德と欠点をもったステレオタイプとして性格付けられている。

Abdool のイスラム戦士としての器量は、Kasim と共にセリングパタムへの道中でヒンドゥー教徒の村長が治める村を襲うマ

4) Allen J. Greenberger, *The British Image of India: A Study in the Literature of Imperialism 1880-1960* (London, Oxford University Press, 1969), 46.

ラータ族を撃退するエピソードに反映されている。無論、Abdoolにとって、マイソール領の村を略奪するマラータはイギリス人以上に憎むべき相手であり、彼らを成敗するのはいわば義務とも言えようが、罪の無い村民をその信仰を問わずに守った彼の活躍は、Kasimを深く感銘させる。老練な軍事能力があるばかりではなく、義侠心もある彼は、Kasimにとってどこまでも運命を共にするのにふさわしい人物に思われた。また三角関係のもつれから、AbdoolはAmeenaに重傷を負わせたり、Kasimとの仲に亀裂をもたらしたりもするが、彼が「率直で偽りのない誠実さ等をもつ人間」であることは、Ameenaを殺害したと思いついて後悔のあまり号泣する様子等に窺い知ることができる。彼がKasimをかばって勝ち目のない戦いに志願したのもいわば自分の罪に対する贖罪であり、若い二人を恨む気持ちは彼の胸中になかった。それは、死を覚悟した彼が妻たちばかりではなく、後継者としてKasimに財産を残すような心使いからも理解される。卑しい生まれから立身出世したためか、Abdoolは恵まれない人々には情け深く、彼らの庇護者となった。Kasimにとって、父親にも思われた彼の死は、たとえ名誉の戦死であっても身を切られるほどつらく、Abdoolの亡骸にとりすがって泣くKasimの姿は、敵のイギリス軍人にさえ痛ましく感じられた。しかし、それほどKasimに慕われたAbdoolが、物語全体の印象としては揶揄の対象でもあるように感じられるのは、彼が私生活において様々な愚行を犯すため、その背景には、イスラム教徒の結婚制度に纏わる問題が浮き彫りにされている。

二人の若い妻をもつAbdoolが、まだ少女

の面影を残すAmeenaを新妻に迎えるのは、故郷のハイデラバードで良縁を求める可憐で美しい彼女の虜になったためであるが、子供に恵まれなかった彼には、親子の年齢差を越えても新たな妻を娶る必要性もあった。彼女には、多くの縁談話があったが、当時経済的に逼迫していたAmeenaの両親にとって、初老で生まれは卑しくても名誉や財産のあるAbdoolと娘との結婚は良縁に思われた。彼らは、Abdoolが贈る高価な宝石や衣装を喜び、将来を不安に感じるAmeenaに夫を尊敬して暮らすよう諭して結婚話をまとめる。無論、経済的には恵まれた生活を保証されるものの、AmeenaにとってAbdoolは尊敬できそうな人物ではあっても、恋心を抱くことのできる存在ではなかった。また結婚後に知らされたAbdoolのもう二人の妻KummooとHoormutの存在は、彼女を不安に陥れる。案の定、何の相談もなく小娘を娶ったAbdoolの身勝手さに二人は怒りに燃え上がるが、彼から実家へ返すと脅かされてやむなくAmeenaを歓迎することを承諾する。しかし新妻に夢中になって彼女たちにつれないAbdoolの態度は、二人を嫉妬心に駆り立てるばかりでなくKummooの母親をも激怒させる。Abdoolのような成り上がり者が高貴な生まれの娘を侮辱するのは許せなかったが、Kummooが実家へ返される不体裁も望まなかった彼女は、AmeenaがAbdoolの寵愛を失うよう魔術師を雇って呪いをかけることを思いつく。呪術には恐怖を感じるものの、他にAbdoolを取り戻す方策のないKummooはHoormutと共に、魔術師の言いつけに従って一か月の下準備を果たし、自らの手で斬首した鳥の血を塗った呪いの印をAmeenaの部屋の戸口に置く。無論そん

な彼女たちの愚行に効力があるとはとても信じ難いが、その印を見た Ameena は他人から呪われていることを知った精神的な打撃によって病の床につく。しかし愚かな Abdool には、呪いをかけた人物を想像することさえできなかった。それどころか、彼は病でやつれた彼女を呪われて「悪魔が内に潜む存在」として遠ざけるようになり、Kummoo のもとへ頻繁に通うようになる。それでも Ameena は二人の仲を嫉妬することもなく、ただ養生のために実家へ帰ることを願い出るが、戦時中の旅の危険を案じた Abdool は許さない。一方、Ameena の不幸を彼女の乳母から聞かされた Kasim は、Abdool の意向にそむいても彼女を命がけでニザーム軍の父親の知り合いに託すことを誓う。なるほどイスラム教徒の妻として Ameena は、他人の Kasim に助けを求めることを「不名誉を犯す」ことであるように感じるが、乳母の強い勧めもあり、彼のもとへかけ込む。そこへ事情もよくわからず、Jaffar の中傷を真に受けてやって来た Abdool は二人が最初で最後の口づけをする場面に激怒して刀を抜き、Ameena に重傷を負わせてしまう。

V

Ameena が犠牲になった一連の事件が、女性の意志を尊重しないイスラム教徒の結婚制度に関わっていることは否定できない。信仰上の問題はさておき、Ameena の心が初老の Abdool よりも、自分を命がけで救った若い Kasim に傾き、Kasim のほうでも彼女

に対する同情心が恋愛感情に変わるというのは、物語の流れからのごく自然の成り行きであろう。また夫の関心を奪った Ameena に対する Kummoo と Hoormut の嫉妬心や、Kummoo の母親の憤りも人間の感情として当然であるように思われる。一夫四妻制を非人間的な唾棄すべき悪弊として批判する見解は、ニザーム領で二人の妻の存在することが災いして起きた事件を取り扱った作者自身の体験に基づくもので⁵⁾それは物語の中でも Kasim を通して次のように述べられている：

紳士諸君、私は一人の妻で満足です。そして神にかけて私の同胞がそうであつたらいいと思います。なぜなら私は、一人の男が十分に愛情を注げるのは、一人の妻だけで、もし妻が二人以上いたら、Ameena を死に追いやりそうになった羨望や嫉妬、野蛮な情念や悪、罪を引き起こすからです (454)

自らの体験も考慮して、複数の妻を求めるイスラム教徒にこのような批判を寄せるのは、キリスト教徒的な倫理感をもつ作者としては当然であろう。しかし Ameena をめぐる人間関係のもつれで、見逃せないのはその要因が本来戦争未亡人の保護等を目的とした一夫四妻制そのものよりも、むしろそれをやみくもに支持するイスラム教徒たちの迷妄性や官能的な気質にあるという問題である。実際に、二人の妻をもつ Abdool との結婚が Ameena の不幸の始まりであるにせよ、彼女が窮地に追い込まれる直接の原因は、女の嫉妬心が多少なりとも理解できるにもかかわらず、官能に溺れて

5) Taylor は 1856 年にある羊を飼う農夫が、子供を得る目的で若い第二夫人を娶ったために正妻から恨まれて殺害された事件を処理している。Taylor, *The Story of My Life*, 268-70 参照。

三人の妻を極端に不平等に取り扱ったり、呪術に惑わされるような Abdool の愚かさなのである。このことは、呪いの印を見た Ameena と Abdool が衝撃を受ける場面に加えられた次の解説からも理解できる：

この啓蒙化された国[イギリス]では、最も教育の程度が低い人にさえこのような愚かしいつまらない事は、嘲笑の種になるだろう。しかし同胞と共に霊魔や妖精、空気の精、その他の超自然的な力や悪魔が存在すると教え込まれ、研鑽や苦行によって人々に効力を及ぼす資格を自らに授けた者の意のままに操られてしまうと思ひ込む Ameena や彼女の夫にとって、その印を目撃するのは恐いことであった...

私はコーランによってそれらの存在が認められているにしても、インドでは教育や地位があって品行方正なイスラム教徒の多くが、忌まわしい呪術や魔術に対する信仰から無縁であることを否定しようとは思わない。しかしその他のイスラム教徒の殆どがあえてそのような信仰を捨てようとしなかったことや、彼らが自分自身でなくても老婆や托鉢僧の力だけは借りて呪術や魔術を秘密で実践していること、ハーレムの女たちの間では、呪術や魔術の存在を否定するのは、マホメットが存在したこと自体を疑うことであること、これらをあえて否定するほど勇敢な者は誰もいない。それにしても Abdool Khan が高い地位や財産を持つ身に昇進しても、彼が下層階級の生まれで、運に恵まれた軍人にしては向こう見ずで無知であり、誕生以来吹き込まれてきた迷信を拭い去れなかったことは覚えておかなければならない...

しかし悲しいかな、多くの高貴な特質、勇猛果敢さ、率直で偽りのない誠実さ等をもつ人間に、ある忌まわしい悪徳とも呼べそうな欠点があることを書くの

は、実に嘆かわしい。それは容易には認識できないが [Abdool]の心の中に潜み、まもなく浮かび上がって哀れな Ameena を窮地に陥れた...

彼は官能主義者だったのである。

(375-77)

Abdool に対する作者のこのような見解には、イスラム教徒 = 迷妄の世界に沈む官能主義者という19世紀前半のイギリス人の人種観が反映されていることは否定できない⁶⁾なるほど、Taylor が描く主なイスラム教徒は、いずれも生彩のある個性的な人物であるが、情念にかられやすいという点においては、ヨーロッパ的な観点から描かれた非ヨーロッパ人のステレオタイプにも感じられる。例えば、Abdool とは対照的に知的で教養のある Kasim でさえ、Ameena に横恋慕する気持ちを、宗教的な戒律や理性によっても抑えることができない。彼が Abdool に対する忠誠心と Ameena への恋愛感情のジレンマに悶え苦しむのも、「アジア人種に内在している燃えるような情念が彼の内面にあって、それが抑圧し難い」(262) ためだとされる。また彼を誘惑しそこなう Kummoo は、Abdool 亡き後「スルタンのハーレムに移されるのが、彼女の不道德ぶりにふさわしいように思われる」(414) という言葉からも理解できるように、インドを描くイギリスの小説家が好んで描く「情動的で官能に溺れるインド婦人」の典型をなしている⁷⁾こうした物語の中のイスラム教徒の否定的な描かれ方に注目すれば、インド人を蔑視するヨーロッパ人に批判的な

6) この点に関しては、Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914* (Ithaca: Cornell University Press, 1988), 135-46 参照。

7) Greenberger, *The British Image of India*, 54-55 参照。

Taylor でさえ、人種差別的な言説の影響を免れなかったことが理解される。しかしこの物語のイスラム教徒らは、それなりの文明や精神性をもった人物であり、19世紀のイギリス小説にしばしば登場する「残虐で官能的な」未開の野蛮人でない。Wilksをはじめとするイギリス人の執筆したマイソール戦記の中で、ティプーは狂信的なイスラムの暴君として批判されるものの、この物語に描かれる彼の人となりを感じられる曖昧さや矛盾は、作者にとってティプーがステレオタイプ化しきれない、何かしら不可解な魅力をもった人物であったことさえ感じさせる。

ティプー・スルタンが野蛮なイスラムの暴君として悪名を轟かせたのは、彼のイギリス人捕虜に対する残酷な取り扱いのためで、イギリスの歴史家に限らず、インド人の間にさえ、彼の宗教的な不寛容性や狂気を指摘する声があったと言われている⁸⁾。そのような傾向が20世紀にイギリスで出版されたインド史にも反映されていることを考慮すれば⁹⁾、実際にマイソール戦争に関わった Wilks が次のようにティプーを酷評するのも驚くべきではないのであろう：

[ハイダル・アリーもティプー]も節操がなかったが、ハイダルには野心を満足させるために、一つの明解で冷静な見解があっ

た。ティプーの内面では、その見解は卑しい情念のために常に曖昧にされたり歪められたのである。彼はイギリス人の栄光を憎んだので、捕虜の中から一番優れた者を選んで殺害した。ヒन्दゥー教が大そう嫌いだったので、その信徒を迫害したり侮辱した...ティプーは迫害が歴史の中でしか残っていない時に、その恐怖の極みを新たにした。長い間ご機嫌だったのに、彼は剣の刃でイスラム教を広めた最後の君主だった。ハイダルの悪徳は、常に政治的な支配力を高めたのに、ティプーの場合はより頻繁に、悪徳のために彼の政治力が損なわれたのである。ハイダルが課す刑罰は野蛮であっても、それは少なくともその目的にかなうものであった。ティプーの法廷や軍隊では、公私混同の不正が罰せられることはなく、しかもそれが悪いことだとは彼自身も承知していた。彼は厳しくするのが悪であるような場合には野蛮さを発揮し、美德であることに対しては自分勝手に振る舞った。もし彼に帝国を維持するのにふさわしい特質があったとすれば、それは奇妙で曖昧なものである。そのような器量が彼になかったことのほうが確かで疑問の余地がない。歴史の審判はマイソールで諺となっている見解「ハイダルは帝国を築くために誕生したがティプーはそれを失うために生まれてきた」と大きくかけ離れてはいなかった。¹⁰⁾

Wilks のティプー観が引用されている物語の中で、ティプーに野蛮なイメージが投影されているのは言うまでもない。数々の証言からティプーの捕虜に対する蛮行がある程度まで真実であったとしたなら、イン

8) Taylorは自らが執筆したインド史の中で、Syed Husseinが主君のティプーの狂気を指摘したことに触れている。Philip M. Taylor, *A Student's Manual of the History of India* (1870; rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1986), 543.

9) Vincent A. Smith, *The Oxford History of India*, 2nd ed. by S. M. Edwardes (Oxford: Clarendon Press, 1923), 585参照。

10) Mark Wilks, *Historical Sketches of the South of India: In an Attempt to Trace the History of Mysoor* (1810; London: Longman, 1817), III, 465.

ド統治に関わった Wilks や Taylor のようなイギリス人にとって彼は正に恐るべきイスラムの暴君に感じられたに違いない。セリンガパタム要塞が陥落する直前に、密かに幽閉されていたイギリス人捕虜たちが報復を恐れたティプーの命令によって惨殺されたというエピソードも、彼に同情的なフランスの史家 Par J. Michaud でさえ史実として取り扱っていることを考慮すれば、¹¹⁾それは恐らく実際の出来事であり、イギリス軍人の間にティプーに対する怨念が喚起されたのも当然であろう。またヒンドゥー教徒に対する迫害に関してもティプー自身が回想録に、マラバル地方のナイル族(Nairs)に対する強制的な改宗等を行ったことを記録しているのである。¹²⁾確かにこうした史実に基づくと思われる事件が、物語の中で詳細に語られているためか、彼のイギリス人やヒンドゥー教徒に対する蛮行は、真に迫る印象を与える。だがティプーがことさら野蛮に感じられるのは、彼の残虐ぶりがイギリス人やヒンドゥー教徒ばかりではなく、同胞の Abdool や Kasim の目にも余るためである。

Kasim が初めてセリンガパタムでヒンドゥー教徒が迫害されていると実感したのは、ティプーが町中で牛を槍で突き殺して、その血を側にいたブラーマンの顔に塗たくって追い立てる場面に遭遇した折であった。以来、彼はティプーの残酷さを非難した Herbert の言葉が真実ではないかと

思い始めるようになる。そんな彼の思いがティプーを見限りたくなるほど確信的になるのは、戦闘の合間に楽しむ狩の最中に再び彼の常軌を逸した戯れを目撃して衝撃を受けたためであった。つがいの象二匹を切り殺した後に、その幼い子象を縛ってヒンドゥーの家来に切り殺させるというティプーのあまりに惨い仕打ちに Kasim が度肝を抜かす場面は、次のように描写されている：

数人が進み出て、刀を差し出した。[ティプー]がその一つを取り上げてあたりを見回した。彼は、気まぐれな悪ふざけを十分に楽しもうという眼差しをしていた。「さあ、Ramah、やれ」と彼は近くにいた恰幅のいいヒンドゥー教徒の金融業者に叫んだ。「お前にやらせよう」

「恐れながら、あなたの下僕は兵士ではありません。生まれてから一度も刀というものを使ったことがないのです」とその金融業者は手を合わせながら言い、恐怖におのきながら前へ進み出た。

「だまれ！」とスルタンは足を踏みならして叫んだ。「お前はこの儂に逆らう気か、刀を取れ、卑しい者よ、命をかけて切れ。さもないとお前のためにならんぞ。」

「しかし、あなたの下僕は、象の血を流すのは地獄へ行くことになるヒンドゥー教徒でございます」とその金融業者は震えながら何とか説得しようとした。

「それならなおさらだ」と、ティプーはその言葉を聞いて最も危険な情念や偏見に急き立てられて叫んだ。

「同志たちよ、お前らはどう思う？ここに異教徒、正しい信仰の敵が一人いる。こいつが地獄へ行くのを助けてやるべきじゃないか…」

11) Par J. Michaud, *History of Mysore: Under Hyder Ali and Tippoo Sultan* trans. V.K. Raman Menon (1926; rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1985), 171参照。

12) この点に関しては、Surendranath Sen, *Studies in Indian History: Historical Records at Goa* (1930; rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1993) 157; Lewin B. Bowring, *Haidar Ali and Tipu Sultan: And the Struggle with Musalman Powers of the South* (1899; rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1997), 218-20参照。

スルタンを取り巻いて追従する野卑な兵士たちは、Ramahの口実を声高な笑い声と嘲りで野次って、彼を急き立てた。その男は、何回も象に打撃を加えることを強いられた。その場に居合わせたヒンドゥー教徒の中で非人間的な残虐行為に加わることを免れた者はいなかった。

そんな場面をこれ以上詳述する必要はない。その哀れな動物は、強者からも弱い者からも切りさいなまれて、しばらくの間苦痛のうめき声をあげていた。その声は、子象が死んで苦痛を加える者を解放するまでの間に次第に細くなっていった。その後、スルタンは自分の象に再び乗っただけで他には何もしなかった。人間の姿をしたこの虎は、その日はもう十分血を見て満足し、それ以上は狩をしなかった。

「何てことだ！」と Kasim は戻ってきて [Abdool] Khan に言った。もう黙って義憤をこらえることができなかった。「もしこんな事が繰り返されたらティプーに仕えるのをやめることを誓うよ。彼の残酷さを見るのは、これで二度目だ。あなたは、あの牛のことを覚えていますか。(256)

ティプーの異教徒の臣民に対する残虐さはこのような場面ばかりではなく、Jaffarの非道を訴えるヒンドゥー教徒が、負け戦で機嫌の悪い彼の命令で象の足に縛り付けられて処刑されるというエピソード等にも窺われる。しかし、ヒンドゥー教を公認していた彼が実際に物語の中に描かれているほど、その信徒に野蛮であったのか、一抹の疑念が生じる。確かに彼はイギリス人捕虜やナイル族に改宗を強制したり、その意向に従わない者を処刑するが、それはマイソール軍の近代化や 'Ahmedy' と呼ばれる軍団に兵士を補充するためであり、¹³⁾ そのような戦法はトルコのイスラム君主の前例にならう

もので驚くに値しない。Surendranath Sen が指摘するように、マイソールの財務を司る役人にヒンドゥー教徒が数多く採用されていたことや、シュリングリ (Shringeri) のヒンドゥー寺院がティプーによって財政的に援助された事実を考慮をすれば、彼の残虐性は一般的には、敵と思われる人物のみに向けられたのではないだろうか。また彼が汎イスラム主義を標榜してアフガニスタンの Zeman Shah 等に援軍を求めたとはいえ、現実にはニザーム領のイスラム教徒を敵に回す一方でフランス人と同盟したティプーがそれほど盲目的な狂信徒であったとは思えない。彼が同胞に宗教的戒律を遵守させ、被征服民や捕虜には改宗を強制したとすれば、それは宗教的と言うよりはむしろ政治的な目的からではなかつただろうか。さらに戦術を星占いで決定したり、夢のお告げで兵士の志気を煽るような彼の戦法にはイスラム教徒的な迷妄性が反映されていると言えようが、ヨーロッパやエジプトにおける英仏の覇権争いを視野に入れて戦略を練ったり、フランスの軍人を雇って軍隊の近代化を図った彼は、当時のインドのイスラム君主にしては珍しく近代的な側面をもつ存在であったとも考えられる。彼がフランス革命をどのように理解したかは、知るよしもないが、その影響を受けて数々の政治や経済上の改革に着手したことは、多くのインド史家によって指摘されている。

ティプーの評価に関する様々な問題を考慮すれば、「ティプーの宗教的な不寛容性や狂信があまりにも強調されすぎている」という Sen の批評は、¹⁴⁾ Taylor が描いたティ

13) Sen, *Studies in Indian History*, 158参照。

14) *Ibid.*, 166.

プー像にもあてはまるように思われる。しかし、いくら野蛮性が強調されているとはいえ、この物語の中でイスラム教徒の臣下には寛大で、一族を思いやるティプーには、血も涙もある人間性が投影されていることも否定できない。彼のイギリス人捕虜やヒンドゥー教徒に対する苛酷な取り扱いさえ、Kasimにとって当初は「不当というよりはむしろそれなりの価値がある(unjustifiable, nay, meritorious) (513)」ように思われる。彼がセリングパタムにそびえるヒンドゥー寺院の壮麗さに感動したのも、それをヒンドゥー信仰が保護されている象徴と感じたからである。確かに異教徒たちは、しばしばティプーの気晴らしのために迫害されるが、イスラム教徒は命令に背かない限り彼の暴力の犠牲になることはない。Herbertがティプーに切り殺されそうになった時も、ティプーはそれを制止した初対面のKasimの僭越さには寛容で、無益な殺人を止めてくれたことに感謝さえする。Kasimの暇乞いにも彼は怒るどころか、長年の忠孝を称えて高価な饒別の品々を与えるほどであった。Michaudの指摘通り、ティプーが臣民から税金を絞り取ったり本格的に横暴になったのが、Cornwallisとの戦いに敗れて二人の息子を人質に取られたり、多額の賠償金を請求された後であったならば、¹⁵⁾「マイソールの幸福な時代が終わった」という責任をティプーのみに負わせることもできな

い。いかに負け戦が決定的になって絶望しても、彼は最後までハーレムの女たちや子供たちの運命を気遣い、家臣一同には自分を見捨てて落ち延びることを許しました。そんな彼の思いやりに感動した忠臣たちは、主君と最後まで運命を共にすることを誓う：

「行け！お前たちはこの儂によく仕えてくれた。儂のために戦い、血も流してくれた。行け。アラーの神がお前たちを守るように！お前たちは今までずっと儂の友で同志だった。儂は苛酷で時に残酷だった。そんな儂を許してくれるか。アラーの哀れな下僕儂を勸弁してくれるか。行け！儂は。この儂はお前たちをずっと愛してきた、そして今。」
彼の話はささげられた。一人の士官が涙を流して陣幕の脇から走り寄り、スルタンの前に身を投げ、彼の膝を抱きしめて激しくむせび泣いた。

ティプーはもうそれ以上耐えられなかった。彼は胸中に沸き起こる激情を静めることができず、泣き出した。彼が涙を流すのを見られたのは初めてだった。それから言葉では言い表せない場面。死ぬまで忠誠を尽くすことを涙を流しながら誓う感きわまる場面が繰り返された。彼らはセリングパタムの町へ退却してその城壁の下で死ぬまで戦う決心をした(436)

ティプーの人物像に投影されている矛盾や曖昧さは、作者が彼を排除されるべきイスラムの暴君としてステレオタイプ化する過程で、マイソール戦争の火種はイギリス

15) Michaudは次のように1792年の敗戦以後、ティプーの人が変わった様子を述べている：

このセリングパタム条約が締結された後、ティプーの人格が全く変わってしまった。彼は自らが被った不名誉に対して復讐することを夢見るようになった。彼の宮廷は歡樂の家ではなくなってしまった。彼は祖国での生活に対してより厳格になり、行政面ではいっそう支配的になった。マイソールの幸福な時代は終わり、その後ずっと君主の宮殿を支配した悲しみは、インドで最も美しい王国を襲った惨事を予告しているかのようであった。(Michaud, *History of Mysore*, 94.)

側の領土拡大欲であり、ティプーはセリンガパタムへの進撃を命じた Richard Wellesley の野望の犠牲者であるというような見解を意識したためであろうか。Thomas Munro によれば、「ティプーの死を嘆き悲しんだ者は、家臣や恐らく彼の子供たちの中にも誰一人としていなかった」はずであるのに、¹⁶⁾物語の中では、彼の葬儀の際にイギリス兵は脱帽して棺を迎え、「外の通りにいた何千人もの民衆は気も狂わんばかりに悲嘆にくれてアラールの神に大声で叫びながら... ティプーの亡骸の前に競ってひれ伏そうとしたのである」(444)。このように描かれるティプーの葬儀の場面は、確かに彼をイスラム教徒の救世主にも感じた人々の存在や、「軍人として死ぬほうが不名誉な屈伏より好ましい」¹⁷⁾と宣言したティプーの壮絶な死にイギリス人が弔意を示したことを伝えようとしている。しかし19世紀前半に、James Mill のようにイギリス側の侵略行為に注目してマイソール戦争を語った人物がごく少数であったことに注目すれば、¹⁸⁾ティプーの死に対して一般のイギリス人が罪の意識を抱いたとは思われない。また、実際にセリンガパタム攻撃の指揮をとった Harris 将軍がティプーのイスラム式の国葬を命じ、仰々しい碑文を墓石に刻むのを許したのも贖罪からではなく、イギリス人の寛容性をインドの民衆に誇示するためだったのではないだろうか。それはともかく、現代の第三者には、イギリスの対イン

ド政策に批判的な James Mill や Michaud のマイソール戦争に対する見解が全く的是なわけではない。即ち、ティプーは現代的な観点からは、暴力を体現するばかりではなく、それを被ったとも見なされる両義的な存在であり、それ故に彼は様々な人々の注目を集めて嫌悪感と同情の入り交じったような視点で描かれたように思われる。

たとえば最初に戦争を仕掛けたのがハイダル・アリーであったとしても、両者の間に長年にわたって攻防戦が繰り返されたのは、イギリス側がマイソールとの間に1769年に交わした和平条約の条項、つまり外敵に攻撃された場合には相互に扶助する約定を破ったことに端を発している。歴代のベンガル総督が、マイソールとの関係を修復することもなく、マラータやニザームを巧みに取り込んでハイダルやティプーを失脚させる機を窺っていたことは否定できない。それは、東インド会社がインドの富に目の眩んだ多数の社員や軍人を抱えるようになるに従って、治安維持を名目に徴税権や独占的な商業権を行使できる領地を新たに求めざるを得なかったためであろう。実際にブラッシーの戦いでフランスに勝って以来、東インド会社は貿易会社や商事会社を装いながら、実質的にはイギリス本国のために

16) *The Cambridge History of India*, ed. by H.H. Dodwell (Cambridge, Cambridge University Press, 1929), V, 342.

17) Taylor, *A Student's Manual of the History of India*, 542.

18) George D. Bearce, *British Attitudes towards India 1784-1858* (1961; rpt. Westport: Green Wood Press, 1982), 75-76参照。

植民地獲得を引き受けるような組織へと変貌していったように思われる。ティプーの目に、和平条約を破るばかりではなく、ニザームやマラータと攻守同盟を密かに結んだり、マイソールの家臣であったはずのトラバンコールのラージャを取り込むイギリスの方策が、侵略行為に映ったのも当然であろう。Cornwallisが、ティプーをセリンガパタムまで追いつめて、マイソールの領土半分と莫大な賠償金を取り上げることに躊躇しなかったのは、彼の平和主義が見せかけに過ぎなかったことを露にしている。しかしそれでもなお、彼はマイソールを二度とイギリスに抵抗できないような壊滅状態に追い込まなかったため、後にインドの植民地化に積極的な人々から批判さえ被ったと言われている。¹⁹⁾そのような人々の期待に答えるかのように、自らをローマ帝国の地方総督(proconsul)になぞらえたRichard Wellesleyは、ティプーが当時フランス領であったモーリシャスの知事に援軍を求めたことを口実にセリンガパタム要塞にイギリスの大軍団を攻め込ませて、ティプーを悶死させた。その結果、マイソールの国土の周辺部はイギリス、マラータ、ニザーム領へ併合され、残された部分は旧ヒンドゥー王朝の遺児に与えられたが、その名ばかりになったマイソール藩王国は、軍事援助条約によってイギリスの傀儡と化したのである。このようないきさつは、Taylor自身が執

筆したインド史 *A Student's Manual of the History of India* (1870)にも叙述されており、²⁰⁾物語の中でも史実が歪められているように感じられる箇所はない。しかし、見逃せないのは、ティプーの野蛮さが強調されるあまり、イギリス側に当然あったはずの略奪行為や暴力が、物語の中ではあまり描かれていないという問題である。例えば、ベドノアで Matthews が戦利品の財宝に執着して戦略を誤ったことは、前述したように物語化されているが、彼が当地を占領する際に住民を略奪したことは、²¹⁾全く描かれていない。ベドノアを再征服しイギリスの軍団を沿岸まで退却させるという協定を破って、Herbertらを捕虜にし Matthews を毒殺させたティプーは、いかにも悪らつであるかのような印象を与えるが、その口実が、イギリス側の財宝の持ち逃げであることも、その宝の在り処も曖昧にされたまま物語は幕切れとなっている。²²⁾またセリンガパタム陥落時にイギリス軍が要塞ばかりではなく、一般の民家を略奪したり婦女子に暴行を加えたことも数行語られているだけである(433)。史実に照らし合わせれば、ティプーが戦いに敗れたのは、ニザームやマラータを味方にしたイギリス軍の戦力がマイソールの兵力を遥かに上回っていたからであったはずなのに、物語の中では Kasim をはじめとする多くの家来にティプーが暴君である故に見捨てられたり裏切

19) Vincent Smith, *The Oxford History of India*, 561参照。

20) Taylor, *A Student's Manual of the History of India*, 467-75, 496-507, 517-25, 539-44.

21) Michaud, *History of Mysore*, 51-53参照。

22) Michaudは、ベドノア要塞に秘蔵されていたダイヤモンドを Matthews の弟が持ち逃げしたことがティプーの逆鱗に触れたことを指摘しているが、Bowringはイスラム教徒に改宗させられて要塞を守っていたナイル人 Shekh Ayáz が財宝を持ち去った犯人であると述べている。Michaud, *History of Mysore*, 56; Bowring, *Haidar Ali and Tipu Sultan*, 121-22.

られたためであるように感じられる！もしスルタンの野蛮さや軽率さに衝撃を受けなければ、Kasim は村を売って家族をマイソールへ上京させたかもしれないのである」(415)。しかし彼は戦場で負傷して敵の Philip Dalton に命を救われた後、捕虜として丁重に扱われるのをきっかけに、それまで抱いていたイギリス人に対する偏見を捨てて、彼らを残虐に取り扱うティプーに反感を抱くようになる：

彼にはもう以前と同じような関心のない気持ちで、スルタンの法外な行為を黙視できなかった。イギリス軍の陣営に滞在して、彼の心は不純な偏見から清められた。そこでは、Philip Dalton の仲間の他にも多くの兵士が退屈を紛らわすために、イスラムの大佐 [Kasim] のベッドの側にやって来て彼の話を聞いたり、Kasim には天国にも感じられる緑の祖国のことを語ってくれたのである (415)

このようにイギリス人への偏見を改めてティプーの野蛮さを再認識した Kasim は、もはや彼のもとでイギリス軍との戦いを繰り返す気がしなくなり、故郷の村へ引退する決意を固める。そんな彼がやがて、セリンガパタム要塞を守るコヴァリー川を渡ることのできる唯一の浅瀬へイギリス軍を導いたのは、彼を暗殺しようとしたティプーに対する個人的な報復というよりは、むしろ故郷の村や Ameena との新たな生活を戦禍から守るためであった。

おわりに

Philip との友情に目覚めた Kasim が、Baird 将軍に従ってセリンガパタムの要塞に先陣を切って乗り込むという物語の顛末には、イギリス側の立場を支持しなくてはならなかった Taylor の作為が感じられる。しかし実際にマイソール戦争において、ニザーム配下のイスラム教徒が最終的にイギリス側に組したり、Kasim の村がニザーム領に併合されたことを考慮すれば、彼の行為はさほど不自然ではないのかもしれない。Kasim が実際に一番乗りの中にいた Harris の息子に置き換えられているとすれば²³⁾ それはインドを統治するイギリス人が父であり、インド人はその父親に従う子供と見なしたいという植民地支配者の即ち作者自身の願望の表れなのであろう。それが夢に過ぎないことは、20 世紀のイギリスのインド支配の終末を見届けられなかった Taylor の知るところではなかった。しかし彼自身40年余りインド支配に携わって、イギリス人がインドの原住民にとって必ずしも歓迎される存在ではないことを悟っていたことは、Herbert らを形容する「Feringhee (「ヨーロッパの野郎）」という言葉に集約されている。また「華麗な東洋」を夢見てインドへ渡った Herbert の苛酷な体験や、彼の行方を案じる家族や許嫁の苦悩を描く副筋に注目すれば、この物語がイギ

23) セリンガパタム要塞に一番乗りで攻め込んだ兵士の中には、イギリス軍の総大将であった Harris 将軍の若い息子がいたと言われている。ブライアン・ガードナー著、浜本正夫訳、『東インド会社』リポート、1989)、190。

リスの植民地政策を謳歌するために執筆されたのではないことは明らかである。Herbert にとって、悲惨な戦争が絶えず、人喰い虎が潜むジャングルの生い茂るインドはイギリス庭園を築けるような楽園ではなかった。彼のインド体験は、正に幻滅の悲哀の物語である。しかし逆境の中でひたむ

きに生きようとする Herbert の態度、命がけで彼を助けようとした Kasim の義侠心、Herbert を探し出そうとする Philip の懸命な姿は感動的で、若いこの三人の間に芽生えた友愛が残酷な戦争を背景にしたこの物語の中で唯一の救いとなっている。